

自由論題分科会 (21日、西キャンパス本館)**〔自由論題B〕 エスニシティ**

〈午前〉24番

座長：平野聡（東京大学）

B-1：ボヤント（桐蔭横浜大学・院）：内モンゴル東部地域における「民族分裂案件」の実態**——ホルチン左翼後旗を中心として——**

1964年、ホルチン左翼後旗（以下は「後旗」と省略する）の教育機関であるガンジガ第一中学校（甘旗卡第一中学校、以下は「一中」と略記する）で、「民族分裂案件」が発生した。この案件は1964年から1969年まで、5年以上も続いた。本報告では、この案件の発生原因と過程、および結果を明らかにする。具体的には、後旗における現地調査および当時の後旗に関する一次資料である公文書を用いて、以下の問題について検討する。すなわち、中共後旗委員会の管理が後旗における教育にどのような影響を与えたのか。また、後旗におけるモンゴル人社会で教育機関のトップであった一中は、当該社会でどのような役割を果たしたのか。中共後旗委員会は、後旗のモンゴル人教育にどのような態度で臨んだのか。さらに、中共後旗委員会や中共ジリム・アイマッグ委員会から「民族分裂案件」と定義された案件の実態はどのようなものか。

現地調査によると、後旗の人々、政府、社会全体がこの案件をほとんど一律に「民族分裂案件」と「公式的」には認識しているが、認識と事実との間にかなりの距離がある。この案件はモンゴル人への教育に大きな影響を与え、さらにそれによって後旗の教育に関する様々な問題が歪曲され続けた。その結果、今日の後旗における教育にも影響を与えるようになっている。

本報告において「民族分裂案件」の問題を解明することは、現在の後旗および内モンゴル東部地域におけるモンゴル人教育の実態を理解するうえで益するところ大であると考えられる。特に、今まで公開されている資料として扱われてこなかった中共ジリム・アイマッグ委員会と中共後旗委員会の公文書を用いて考察することで、本報告は既存の研究の空隙を埋め、今後の研究の端緒としても有意義なものとなる。

B-2：暁剛（明治大学・院）：内モンゴル東部地域における草地開墾と漢族移民**——ホルチン左翼後旗を事例として——**

内モンゴル東部地域の草地開墾は清朝末期に始まり、中華民国、満州国などを経て、中華人民共和国の統治下においてさらにエスカレートした。中国共産党の「移民政策」は、今までの草地開墾の歴史において、漢族にとって最も「成功」した業績であるといえる。

本報告では、中国共産党の漢族移民政策について、ホルチン左翼後旗を事例としてとりあげる。この地域は、内モンゴル自治区のなかでもモンゴル人の比率が高い地域の一つであり、土地資源としては、草地、耕地（畑）、沙漠の混在する地域である。

本報告では、ホルチン左翼後旗における漢族入植にともなう草地の耕地への転換、およびその影響を受けたモンゴル族の遊牧業から定住半農半牧畜業化の過程について、建国直後の中国共産党ホルチン左翼後旗委員会の公文書を用いて分析する。それによって、同委員会が中国共産党中央委員会および内モンゴル自治区委員会の「開墾するために移民させ、耕地面積を拡大し、食糧を増やすことに関する初歩的意見」という命令を受け止めながらも、この政策に反対していたことを明らかにする。また、「移民政

自由論題B

策」の実施において、中共中央が地方政府をいかに動かし、コントロールしていたかについても触れる。

中共中央の開墾の目的は、①内モンゴル地域以外に住む漢民族の生業を確保すること、②食糧不足を解消することにあった。また、中共中央は、モンゴル民族地域が漢民族地域と比べて、「面積が広く、人口が少ない」という認識を持っており、草地開墾が「農村の労働生産性や牧畜業の発展に積極的な役割を果たした」と主張した。

しかし、モンゴル人の立場からみると、こうした主張は中国共産党の認識と必ずしも一致するとはいえない。なぜなら、この政策の結果、モンゴル人居住地域内の大量の草地が開墾され、牧畜業を営む面積は狭くなったうえに、モンゴル人の伝統文化も大きな影響を受け、モンゴル人の定住化と農耕文化が一層進んだからである。

B-3：西野可奈（東京工業大学）：1930年代中国社会学における「人種」概念

「人種」という問題設定が「亡国」と深く結びついた中国における国民国家建設を論じた先行研究としては、吉澤誠一郎『愛国主義の創成—ナショナリズムから近代中国を見る』2003年、ならびに西村成雄『20世紀中国の政治空間—「中華民族的国民国家」の凝集力』2004年、がまず挙げられる。両氏は共に「想像の共同体」である近代国民国家創出に向かう近現代中国の葛藤を詳細に分析する一方で、「人種」問題については中華民族・中華世界という文化・文明共同体的概念に包摂して実体的に論じている。実のところ「人種概念は構築された虚構である一方で、この概念を通じて構築された人種間関係と人種的アイデンティティは現に存在する。したがって社会的経験のレベルにおいて人種概念はいぜんとして有効な分析概念であることになる」（浦野茂「類型から集団へ—人種をめぐる社会と科学」『概念分析の社会学—社会的経験と人間の科学』2009年）、が指摘するように、「人種」それ自体は歴史的に構築されたフィクションである。「フィクション」としての人種概念構築の歴史を中国における女性の身体やジェンダー問題に即して思想史の立場から詳細に分析しているのが坂元ひろ子『中国民族主義の神話—人種・身体・ジェンダー』2004年、である。坂元氏は纏足概念の変容などについて上記の浦野氏が指摘する「社会的経験レベル」で精密な分析を行う一方、著作の後半で取り上げている費孝通の人類学的・民族学的研究の分析に関しては必ずしもそうではない。

本報告では、費孝通が本格的に活躍する以前の1920年代後半から30年代における、当時の中国の人々の特定の経験や行為を通じて「中国社会」を記述しようとした中国社会学の成果に注目し、特に中国社会学における「人種」と「中国社会」の論じられ方や結び付けられ方の関係性を明らかにしていきたい。